Osaka University Knowledge Archive

Title	デュルケム教育理論における「コレージュ」の位置-現代「中等教育」の視座を求めて-
Author(s)	鬼頭, 尚子
Citation	大阪大学教育学年報. 1 P.143-P.156
Issue Date	1996-03
Text Version	publisher
URL	https://doi.org/10.18910/5088
DOI	10.18910/5088
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

大阪大学教育学年報 創刊号（1996年）
Annals of Educational Studies Vol.1

デュルケム教育理論における「コレージュ」の位置
—現代「中等教育」の視座を求めて—

鬼　頭　尚　子

【要旨】

本稿の目的は、デュルケムの著作『フランスにおける教育の発達』を読み解くことによって、初等教育から高等教育へとつながる全学校体系を視野に入れつつ、高校教育とは何かという問題を考えることにある。すなわち、高校における教育は、義務教育や高等教育とは異なる独自の教育段階なのか、もしそうであるならその独自性とはどこにあるのか、という問いに対する答えを探ることである。

まず、デュルケムの記述に沿って、彼の同時代における中等教育機関である「コレージュ」の発展の歴史を探り、高等教育機関としての「ユニヴェルシテ」との比較を試みる。そして、そのことによってデュルケムが抽出した、すべての学校教育体系に必要な三つの要素——すなわち、思考力の養成、学校全体としてのまとまり、社会変化への対応——を明示化し、それらの観点から中等教育の定義を試みる。そのなかで、初等（義務）教育とも高等教育とも異なる、中等教育の独自性が明らかにされる。

すなわちデュルケムによれば、中等教育とは、「一般的な観点から、省察する能力を目覚めさせる」ことによって、初等教育とは一線を画し、さらにこうした省察力を「一般的な観点から」つまり特定の職業に制限されない形で発達させてゆく点で、高等教育とも異なる。この考察によって、現代の中等教育が抱えている「準義務教育化」と「多様化」という、一見相反するように思われる二つの問題に対する指針が見いだされるだろう。

はじめに

今日わが国の中等教育は、前期中等教育機関である中学校と後期中等教育機関である高等学校との二つから成立している。戦後の学制改革により、中学校は義務教育となり、高等学校も、学校による選抜を原則にしているものの該当年齢人口の96%が進学するようになり、実質的には希望者全員の進学がほぼ可能となったといっても過言ではない状況にある。こうして高等学校は「準義務教育機関」とまで言われるようになった。

このように高校を「準義務教育機関」とみなす立場は、結局、高校教育を義務教育である初等教育の延長とみなし、その枠組みの一環として組み込むことになる。つまり、すべての人に「共通」する最低限必要なものとしての初等教育を延長し、その質・内容をより高度なものにしようと目指すことに他ならない。

だが他方、このような高校の「義務教育」化により、生徒の学力、進学動機、卒業後の進路が極めて多様となり、こうしたニーズに従来の高校の教育課程の枠組みでは対応しえなくなってきている。つまり、「高校を出ることが世間並みの条件となった段階で、その教育と質の問題に方向転換を迫られることになった」（門脇、陣内編　1992、10頁）というのである。そこから、昨今の高校改革により、カリキュラムを多様化・柔軟化・個別化してゆく傾向が現れてきた[1]。

しかし、「多様な」カリキュラムを提供することは、もともと高等教育の特徴である。つまり、

高校におけるカリキュラムが多様化するのならば、そこでの教育内容はむしろ高等教育により近いものとなるはずである。これは先に述べた「共通性」および「義務教育」としての高校教育の特徴とは相容れないように思われる。

このように、現在の高校教育をめぐって、そのカリキュラムにおける共通性と多様性のどちらを強調するかによって、一見相反するように思われる二つの観点が存在する。つまり、前者の観点は高校のカリキュラムを初等（義務）教育に還元し、後者の観点はそれを高等教育に還元するのである。だがいずれにせよ、どちらの場合も高校教育の独自性については省みられず、初等教育（義務教育）か高等教育かのいずれかのカテゴリーに従属させるだけで事足れりとしてきた。そもそも高校教育は、独自の教育段階なのか。それとも、初等（義務）教育から高等教育へと移行するための通過点にすぎず、いずれは義務教育かもしくは高等教育に組み入れられてゆくものなのか。もし高校教育の段階が、義務教育や高等教育とは異なる、独自の存在理由を有しているとしたら、それはいったいどこにあるのだろうか。

そこで本稿では、こうした状況を前にして、初等教育から高等教育へとつながる学校体系を視野に入れつつ、高校教育（後期中等教育）とは何かという問題を考えてみたい。これに際しては、20世紀初頭のフランスにおいて、学校体系の全体を視野に収めながら中等教育の研究をした、デュルケムの『フランスにおける教育の発達』(Durkheim 1938)[2]が、われわれに一つの有益な視座を提供してくれよう。というのも学校教育の歴史全般を研究することによって中等教育を定義し、それを初等教育から高等教育に至る学校体系全体の問題にまで展開してみせているのは、デュルケムのこの著作が唯一といってもよいからである。

1．講義「フランスにおける教育の発達」の背景

デュルケムは1902年、パリ（ソルボンヌ）大学「教育科学」講座の講師となり、将来教職に就く学生のための講義を企画し、実施する任務を負うことになった。デュルケムは、教職希望者を対象とした授業科目「フランスにおける教育の歴史(Histoire de l'enseignement en France)」において、1904年から05年にかけて「フランスにおける中等教育の発達とその役割(Evolution et rôle de l'enseignement secondaire en France)」と題する講義（後に『フランスにおける教育の発達』と題して刊行される）を26回にわたって行い、またそれ以後も第一次世界大戦勃発まで継続して行った[3]。

デュルケムがパリ大学に赴任してきた当時のフランスは、近代的な教育制度が軌道に乗ろうとしていた時期でもある。1789年の大革命、さらには普仏戦争、内乱（パリ・コミューン）を経験してきたフランスでは、民主主義国家の再建に向けて、教育体制全般の改革に大きな期待がかけられていた。他ならぬデュルケムも政府に協力する立場にあり、第三共和政下の教育体制[4]について考える任を負う、「時の政府が期待する、国全体の教育者」(井上、大村編　1993、50頁）でもあった。

デュルケムはこうした政府の教育政策に資することを目指し、1904年に講義「フランスにおける中等教育の発達とその役割」を開講する。この講義のなかでデュルケムが問題としている教育の歴史は、フランスにおける教育の歴史全般ではなく、学校教育の歴史である。つまり学校と

いう特定の空間に生徒が集められ、そこで教師から集中的、系統的に教えを受けるという形態を備えた学校教育を問題にしている。したがって、デュルケムにとってみれば、革命期までに教育機関としての組織を完備していたのは、ユニヴェルシテ（universitéとコレージュ（collège）だけであった。デュルケムはこの講義のなかで、20世紀初頭の観点からフランスの学校教育の歴史を眺め、中世から存続しているユニヴェルシテを高等教育機関の前身とみなし、コレージュを中等教育機関として位置づけている。しかしもちろん、ユニヴェルシテにしてもコレージュにしても、現在の「大学」や中等教育機関とは大いに異なっていた[5]。

さて、彼はこの講義の冒頭で、本年度自分がこの研究を行うに至った経緯について、次のように語っている。

> 本年度は、ずっと以前から私の関心を惹きつけてきたテーマについて研究したいと思う。私が今日のように専門的に教育学を教える任を負っていなかった頃でさえ、フランスの中等教育がどのようにして形成され、発達してきたかということを探求したいという思いに私はとらわれていた。それほどに、私にとってこの研究は普遍的な意義 intérêt général をもつように思えるのである 。(Durkheim 1938,p.9 : 邦訳、21頁)（傍点筆者）

ここで、中等教育を研究するに際しての実践的および学問的な動機が、はっきりと示されている点は特筆に値する。すなわち、この二種の動機こそデュルケムが、フランスにおける中等教育の歴史的研究に取り組む際の二つの姿勢を特徴づけるものなのである。

まず第一に、時の教育改革に直接関与する学者として、第三共和政下の教育制度改革に対して実践的な指針を与えようとする姿勢がある。事実この講義の「結論」として、これからの中等教育の目的は「生徒の思考力を養成すること」にあり、生徒に「人間」と「自然」を考えさせることによって、その思考を養成していくべきであるという論が明確に述べられている。

さて、もう一つの立場は、純粋に「学問的」関心に突き動かされて研究に取り組む姿勢であり、第一の実践的姿勢とは趣を異にする。もともとこの研究を始める以前から、フランスの教育の歴史においては、長い期間にわたり中等教育（つまりコレージュ）が、初等教育・高等教育に比してけた外れに重要な役割を果たしてきたとの認識をデュルケムは持っていた(Durkheim 1938, p.125 : 邦訳、222頁)。さらに、中等教育がこうした地位にあったのは、たんなる偶然ではなく、何百年にもわたって中等教育が有してきた本質、デュルケムの言葉を借りれば中等教育のもつ「内在的特性 caractères intrinsèques」(Durkheim 1938 , pp.124－125. : 邦訳、221－222頁. ）のために、そうなる必然性があるはずだと確信していたのである。デュルケムは、当時の中等教育のあり方を探るという実践的な目的の他に、この中等教育のもつ内在的特性を明確にしたいという強い学問的関心に突き動かされていたのである。

そこで本稿では、後者の方に焦点を当てるのであるが、その理由はこの解答のなかに、現在の中等教育が抱える諸問題に有益な示唆を与える様々なテーマが潜んでいると思われるからである。実践的解答が、講義の結論として明示的に述べられているのに対し、学問的解答についてはデュルケム自身、明確な形では示しておらず、この講義全体を通して紡ぎ出されてくるような類のものである。したがって、本稿ではまず後者の解答に具体的な形を与え、次にこの解答をフランス

の第三共和政という時代の文脈だけでなく、現代の日本の中等教育という文脈の中に据え直して考察を試みたい。

2．ユニヴェルシテとコレージュ

デュルケムは、中等教育がもつ内在的特性を明らかにするために、まずコレージュ誕生の経緯、およびユニヴェルシテとコレージュにおける外在的・制度的な特徴を比較することからはじめる。つまり、「教授内容」と「組織形態」に関して、コレージュとユニヴェルシテを具体的に比較する作業を通して、その内在的特性を抽き出そうとしているのである。

こうした議論に立ち入る前にまず、デュルケムとともに、人文学部がユニヴェルシテから独立し、コレージュとなった過程を辿っておきたい。というのもコレージュ誕生の経緯のなかにすでに、後により明確な形をとって現れる、ユニヴェルシテとの間の本質的差異が見て取れるからである。

(1) コレージュの誕生：人文学部のユニヴェルシテからの独立

コレージュ、ひいては後の中等教育の母胎となったのは、ユニヴェルシテの人文学部であった。中世のユニヴェルシテは、神学・法学・医学の上級三学部と人文学部、および学校外の学生生活を管理する同郷会から組織されていた。上級三学部に進級する前に、全ての学生は一定期間人文学部に籍をおいて学ばなければならなかった。

デュルケムによると、13、4歳で勉学のためにパリを訪れた少年たちは、まず、パリのシテ島で教師業を営む何百人の中から、自分が師事する教師を探し、その教師に世俗的当局（今でいう警察）に対する保証人になってもらわなければならなかった。そうすることによって学生は一種の治外法権の恩恵に浴することができたのである。師事する教師が決まると、今度は下宿だけではなく一緒に下宿する仲間を探さなければならない。教師を決めたり、下宿を求めたりという生活上の必要から、次第に出身地を同じくする者同志が協力するようになり、同郷会組織が形成され、共同で建物を借りて暮らすようになる。

一方、裕福な生徒と極貧の生徒たちはこれとは異なる生活を送っていた。裕福な生徒は召使いを雇い、一人で暮らしていた。しかしコレージュの誕生に関して注目すべきは貧しい生徒の生活である。慈善の精神に富む一部のカトリック教徒は、こうした貧しい生徒たちのために、無料で宿泊し生活できるような施設[6]を提供し、この慈善寮がコレージュと呼ばれ、現在用いられている意味でのコレージュ[7]という言葉の起源となった。

コレージュと呼ばれるこうした慈善寮は、裕福な学生の一人暮らしや、一般的な学生の寮よりも次の二つの点において大きな利点を有していた。まず第一に、学生を監督するためのチューター（教師）が寮で生活を共にしたという点である。学生は寮に帰ってからもチューターに質問することができ、寮内では勉強会なども盛んに開かれていた。第二は、慈善寮は学生数が多いということもあり、図書館を備えていたという点である。こうした二つの大きなメリットにより、慈善寮には入る必要のない経済的に余裕のある学生まで次第に入寮を希望するようになったため（ただしこうした学生は寮費を納めた）、慈善寮に入る学生が増加する。その結果、寮内で行われる

補習講義も多くなり、学生が学校に行くよりも、教師が寮に来て講義をする方が都合がよいということになり、人文学部が学生の寮に過ぎないコレージュへと移動してゆくのである。以上がコレージュによって人文学部が吸収されるに至った過程である。

さらにデュルケムは、こうした動きを促進した今一つの大きな要因を指摘している。それはコレージュのもつ「道徳的な利益 avantages moraux」(Durkheim 1938、p.189／邦訳、328頁)であった。人文学部に所属する13～15歳の学生は、その若さにもかかわらず、ユニヴェルシテの自由奔放な生活を楽しんでいた。学生たちは、まだ充分な分別をもつまでには成長しておらず、その結果、当時の人文学部の学生生活は、ありとあらゆる種類の乱行と無秩序に満ち溢れていた。しかも学生は治外法権を享受できたために、罰せられることはなかったのである。学生であれば、たとえ絞首刑にあたる罪を犯しても鞭で打たれる程度ですんだという。ところが、コレージュに居住していた学生は、寮内に学生を監督する教師が居住していたために、こうした乱行で世間を騒がせることは極めて希れであった。ユニヴェルシテ側は学生の無秩序な生活にほとほと手を焼き、これを防ぐために学生をコレージュに入れたがるようになる。そして15世紀半ばにもなると、今度はコレージュに入寮しなければユニヴェルシテには入学できなくなるのである(Durkheim 1938、第1部第10章参照)。

コレージュ誕生のもともとのきっかけは、故郷を離れてパリにやってきた若い学生に住居を提供することにあったのだが、治外法権を享受していた若い学生の乱行を防ぐために、ユニヴェルシテ側は入学の要件として入寮を強制し、人文学部自体もコレージュに移動してきた。以降、コレージュは名実ともに寄宿学校となるのである。

コレージュが誕生し、それに伴って人文学部がユニヴェルシテからコレージュへと移動したという事実、ここにデュルケムは鋭く目を付けていた。その理由はなぜか。それを探ることによって、コレージュとユニヴェルシテとの教授内容の違いが明らかとなろう。以下、デュルケムとともに、第二節ではユニヴェルシテとコレージュとの違いを教授内容の観点から、そして第三節では組織形態の観点からさらに比較・検討したい。

(2) ユニヴェルシテとコレージュの比較：教授内容

中世ユニヴェルシテの人文学部は、神学・法学・医学という専門学部に移行する前段階に位置する、全学生の共通の入り口ではあったが、そこでなされていた教育は、現在でいうところの一般教養とはかなり性格を異にするものであった。つまり人文学部では、当時の最高水準の知的文化が教授されていたのである。そしてこの人文学部のカリキュラムが生徒の思考力の養成を目指すものであったからこそ、デュルケムは、人文学部がユニヴェルシテからコレージュへと移行したことに大きな意味を見出していたのである。

中世ユニヴェルシテの人文学部で、最も重要な位置を占めていたのは弁証法的な論理学であった。生徒たちは、アリストテレスの『範疇論』や『命題論』という論理学の注釈を聞きながら、いかに自らの思想を論理的に展開するかを学習していた。また少なくとも週に一度は、仮想の論敵に対する討論の実地練習も行われていた。こうした講義や思考訓練を通して、学生は他人と議論し、相手を論破する方法、つまり自ら考え、その考えを説得力を持って他者に伝える技術を身につけていったのである(Durkheim 1938：邦訳 第1部12章およびLeon 1967, p.26.：邦訳、

30頁）。

また「論理学」は当時の知的分野の最高峰であったために、論理学が教授されている人文学部は上級三学部よりも聴講者が圧倒的に多く、また当然のことながら学問的威信もすこぶる高かった。まさに「人文学部は最も活気のあるところであり、人々が群をなして殺到し、あらゆる人々の耳目を集める場所であった」(Durkheim 1938, p.125 : 邦訳 、221－222頁)のである。

一方、ユニヴェルシテにおける教授内容はどのようなものであったのだろうか。ユニヴェルシテの神学・法学・医学部の上級三学部は、専門的な職業教育を施すところであり、そこでなされる教育は学生の思考力を養成する知的訓練というよりは、むしろ職業訓練であった。デュルケムの認識によれば、上級三学部は、主として宗教界、医学界、法曹界の徒弟訓練の機関としてのみ機能していたのである。

> 今も昔も変わらず、法学部や医学部同様、神学部もまた特殊な専門学校であり、特定の職業に就くための準備を行うところであった。唯一、人文学部がそうした利害とは無関係な一般教養を教える機関であった［・・・］(Durkheim 1938, p.118. ：邦訳、211頁)。

このようにデュルケムは中世の人文学部だけではなく、当時のコレージュに至るまで、何百年にもわたる教授内容を、ユニヴェルシテと比較しながら綿密に分析している。デュルケムによる、この教授内容という外在的特性の分析から、コレージュにおける内在的特性を抽き出してみよう。

まず第一は、それぞれの時代における最も知的威信の高い思想や哲学がコレージュで教授されていた。言葉を換えれば、フランスの知的文化はコレージュでつくられ継承されてきたという点である。次に第二点として、そこでの教授内容が、一般的な知識伝達に止まらず、その時代の最先端の思想や哲学を含んでいたために、そこで学んだ生徒たちは、高い教養とともに論理的な思考力を身につけることが可能となったことが挙げられる。この二点こそ、デュルケムが着目したコレージュにおける教授内容の「内在的特性」に他ならない。

さらに、デュルケムがこうしたコレージュの教授内容の特性を重視し、中等教育の目的を「一般的な観点から省察する能力　facultés de réflexion en général を目覚めさせ、発達させること」(Durkheim 1938, p.377 : 邦訳、635頁)と定義しているのは、注目に値する。つまり、生徒が一定の方向へと向かうように、彼らの思考力および判断力、さらには推論する力を育むのである。さらにここでデュルケムが注意を喚起しているのは、あくまで「一般的な観点から」思考力を育むことが肝心で、特定の職業にのみ有効な、限定された観点から思考する能力ではない(Durkheim 1938, p.383 : 邦訳1981、664頁）という点である。

(3) ユニヴェルシテとコレージュの比較：組織形態

この節では、ユニヴェルシテとコレージュとの違いを、その集団形態という観点から比較してみたい。デュルケムの言葉で言うなら、「道徳性」の違いである。

先に、コレージュの成立過程を述べた際に言及した通り、コレージュはもともと年少の学生

を物質的に保護することを目的として作られた寮であった。それが青少年の風紀の乱れを取り締まるという、道徳的な目的も加わって、次第にユニヴェルシテの人文学部をも吸収するに至ったのである。このようにして寄宿学校が完成したわけであるが、デュルケムはコレージュのもつこの寄宿学校という性質に関しては、むしろ否定的に捉えていた。

つまりデュルケムによると、寮は学生を効率よく保護し、監督することをその主たる目的としている。そのため寮の規模は、一般の家庭とさほど異ならない方が望ましい。つまり寮の大きさは、学生を指導する教師が、寮内の学生全員と親しく接することができる範囲の規模でなければならないのである。一方、学校は、複数の教師が多数の生徒を教える場に他ならず、沢山の教師が集まれば集まるほど、そこでの教育は高度なものとなる。したがって、学校の規模は大きいにこしたことはないのである。

このように、寮制度と学校制度は互いに相異なる要請を備えているため、両者の統合は、どちらの制度にとってもある種の犠牲を伴うものとなる(Durkheim 1938, p.138 : 邦訳、242頁)。結局、コレージュのような寄宿学校の制度は、学校と寮という相容れない二つの制度を、一方の不利益を顧みずに統合したものであり、元来矛盾した制度であるとデュルケムは結論づけている。

しかしながら、デュルケムは寄宿学校の制度を否定的に捉えながらも、寄宿学校という性質の中にユニヴェルシテには存在しない、一つの大きなメリットを見出していた。それは寄宿学校が持つ、人々を統合する力、デュルケムの言葉によれば「コレージュのもつ道徳的な特質」なのである。

多くの人々が寝起きを共にして勉学に励む際には、人々が観念や感情をある程度共有していることや、その集団の中に規律や道徳規範が存在すること、つまり共同精神の形成が不可欠の前提となる(Durkheim 1938, p.346 : 邦訳、601頁)。コレージュの場合は、寄宿学校であったがゆえに、自ずと一つの行動規範や価値体系を共有することが可能となっていた。つまり、コレージュでは、昼間の授業において、食事において、さらには生活の様々な場面において、教師も生徒も互いに共通する感情を等しく確認し合っていた。すなわち、コレージュで学ぶ生徒と教師は、同一の道徳規範を共有する一個の共同体を形づくっていたといえるだろう。

他方、ユニヴェルシテもまた一つの道徳規範を有する共同体だったのであろうか。結論から先にいうと、デュルケムの認識では、ユニヴェルシテが、教師と生徒とを含む一つの道徳共同体となるのは原理的に不可能であった。というのも、ユニヴェルシテは「もともと一つの同業組合corporation であった」(Durkheim 1938, p.191 : 邦訳、331頁)のだから。

すなわちユニヴェルシテというのは、元をたどればカトリック教会との対立から生まれた教師の組合、ギルドであった。フランスにおいて学校は、カトリック教会の修道院に附属する施設として登場する。11世紀頃までは、教会や修道院というカトリック教会の施設内に併設され、教鞭をとる教師もまた教会組織の一員であった。12世紀に入り、学生数の増加につれ、教師が教会の施設外で私的に学校を開設することを認めざるをえなくなった 。こうして教師が教会施設を出て個人的に学生を教え始めるようになるが、そうなると直ちに彼らは教師の組合を結成し、教会への従属[8]を断ち切るべく教会と闘争を開始する。そしてついに教師の組合は独立を勝ち取って、1210年には正式に成文化された規約をもつに至り、組織としては確立する。このように、元来ユ

ニヴェルシテという言葉は、教師の同業組合あるいは、組合の構成員を意味したのである。

したがってユニヴェルシテにおいて学生は、これから教師の同業組合に新たに加入する候補者と見なされてはいたが、組合の側は、新入会員の受け入れには極めて慎重であり、入会するにあたっては、一連の段階的な手続きを踏むことが必要とされていたのである。つまり学生が正式の会員となるには、バカロレア（大学入学資格）に合格し、さらにリサンシエ（学士号）やドクトラ（博士号）を得るための試験を受けなければならず、容易には入会を許されなかった。こうした学位を授与する試験制度の存在自体が、同業組合の閉鎖的な性質を如実に示すものである。他の業種の組合同様、教師の組合も、外部に対して極めて高い障壁をめぐらせており、教師と学生との間には常に一定の距離が保たれていた(Durkheim 1938,第1部11章)。したがってユニヴェルシテは、教師にとっては、一つの道徳共同体だったかもしれないが、その性質上教師と生徒とを含む共同体とはなり得なかったのである。

このようにデュルケムは、コレージュが寄宿学校であったがゆえに一つの道徳共同体となりえたという点を高く評価していた。他方ユニヴェルシテは、教師と学生との間に、同業組合への所属をめぐって明確な一線を引いていたため、教師と学生とを含んだ共同体を形作るには至らなかった。

3．進化してゆくコレージュ／進化を止めたユニヴェルシテ

第2章では、デュルケムによるユニヴェルシテとコレージュとの「教授内容」および「組織形態」に関する比較から、内在的特性の違いを明らかにした。つまりその差異は、教授内容においては「思考力の養成（コレージュ）」対「専門・職業教育（ユニヴェルシテ）」であり、組織形態に関しては、「寄宿学校（コレージュ）」対「同業組合（ユニヴェルシテ）」であった。こうした対比を本章では、「個人の自律」と「集団のまとまり」および「社会変化への対応」という観点から整理し直してみたい。

(1) 「個人の自律」と「集団のまとまり」

「集団のまとまり」に関する違いは、ユニヴェルシテが専ら教師のまとまりであるのに対し、コレージュは教師と生徒とを含むまとまりであるという点にあった。問題は、「教授内容」のもつ意味である。一見すると、コレージュで教えられていた一般教養は、全ての生徒に共通であるために、主として集団をまとめる機能を果たすかにみえる。しかしデュルケムがコレージュのカリキュラムにこれほどまでに執着した理由は、そのカリキュラムによって、各個人の思考力が養成されていたからであった。コレージュでの教育は全生徒を対象とすると同時に、全ての生徒を一個の自律した個人にするという機能を持っている。

一方、ユニヴェルシテの専門・職業教育も生徒をそれぞれ異なる職業に向けて準備させることを通して個人としての自律性を育む。このようにしてみてくると、コレージュとユニヴェルシテにおける教育はいずれも、「個人を自律」させる側面を持っている。しかしながら、両者は、生徒と集団との結びつき方において決定的に異なるのである。

ここで、デュルケムがコレージュの寄宿学校的性質を否定しつつも、それに固執していた事実

を想い起こそう。コレージュでの教育は、思考力の養成によって、生徒を自律的な個人にしながらも、寄宿学校だったがゆえに集団のまとまりを得ることもできた。その結果、本来なら両立が困難である「個人の自律」と「集団のまとまり」という二つの機能が、比較的望ましい姿で併存し、かつ両機能が連動していたのであった。一方、ユニヴェルシテは、もともと教師の同業組合から出発したという事情もあって、この二つの機能がバランス良く存在できなかった。つまり自律は保証されるが、集団のまとまりをうまくつくることはできなかったのである。

こうしたデュルケムのコレージュに対する執着からわかるのは、彼が「個人の自律」と「集団のまとまり」の両方を強調しているという点である。これまでは『道徳教育論』で論じられている「集団への愛着」がクローズアップされてきた結果、デュルケムの教育論における統合機能が過度に強調され、保守的なイメージを与えてきたことは否定できないであろう。その理由として、『道徳教育論』が専ら単独で取り上げられて論じられてきたこと、また『道徳教育論』が初等教育段階に限定して集団のまとまりを論じたという認識が希薄だったこと、さらに「小学校における知的教育論」という講義を彼が行っていたにもかかわらずその草稿が残っていないこと[9]などが挙げられる。しかしながら、『道徳教育論』と『フランスにおける教育の発達』を併せ読むならば、デュルケムの考えていた学校としてのまとまりは、生徒の自律抜きには考えられず、生徒が個として自律してゆく過程の中で、集団と結びつくといった性質ものであることがわかる。もちろん、生徒個人の自律や集団のまとまりは、その質や内容において、初等教育と高等教育とでは当然異なってくるが、どの教育段階においても両者は不可欠である。初等教育には、初等教育なりの自律のさせ方があり、また集団への愛着の持たせ方があるということなのである。

(2) 社会の変化への対応

デュルケムが執着したコレージュの内在的特性の第三点目は、個人と集団とのバランスがとれ、それらがうまく嚙み合って何百年にもわたり自らを変化させてきたことである。つまりコレージュが外部の環境へ「適応」し「進化」することができたという点である。進化してきたという特性は、前二者の「精神の形成」や「道徳共同体」とは次元を異にするもので、これら二つの特性から結果として出てくるものでもある。

11世紀に教師の組合から出発したユニヴェルシテは、次第にその組織化を進め、16世紀のルネッサンスを迎える頃までには、ほぼ現在と同じ様態を示すようになっていた(Durkheim 1938,第2部2章)。デュルケムによれば、ユニヴェルシテは、その組織が一応の完成をみると、その後は自分たちをとりまく周囲の様々な状況に適応してゆかなくなったという。その理由として、デュルケムはここでもまた、ユニヴェルシテが教師の同業組合であることを挙げている。

デュルケムは、このユニヴェルシテがもつ同業組合的性質に「一抹の不安 l'ombre au tableau」(Durkheim 1938, p.191：邦訳、331－332頁)を感じていた。つまり、同業組合というものは、あらゆる競争をなくし、独占的に営業することをその目的としているので、ひとたび組合の独占的な権利が確立し、それが不動のものとなると、もうそれ以上、革新したり、変化したりする必然性はなくなるからである。

> 同業組合というものは周囲で起こりつつあった新しい要請に関心を示したり、その要求に応えようと努力することには全く無関心であった。組合自身が孤立し、周囲との接点を失って行ったのである。ユニヴェルシテもまたこうした同業組合の一つであったので、同様の危険にさらされていた(Durkheim 1938, p.191 : 邦訳1981、331－332頁) 。

このようにユニヴェルシテが周囲との接点をなくしていったため、教育の発達が国の発達より大幅に遅れてその後を追いかけてゆくことになる。社会の変化も、新しい思想も、ユニヴェルシテに影響を与えることはほとんどなかった。そのため、教授課程も教授方法も変化する必要がなかったのである[10] 。

このようにユニヴェルシテは同業組合的な性質を有していたために、いったんその組織が確立すると周囲の社会環境と接点を失い、何世紀も変化しなかった。一方、コレージュはどうだったのだろうか。最初は、ユニヴェルシテ附属のコレージュしか存在しなかったが、16世紀の中頃になり、ユニヴェルシテという同業組合に対抗して、新たな教育のための同業組合が成立した(Durkheim 1938, p.266 : 邦訳1981、463－464頁)。この新たな同業組合とはジェズイット修道会であり、ジェズイット修道会がユニヴェルシテとの交渉の結果、ようやくコレージュの創立許可を得て開校したのを皮切りに、ユニヴェルシテ付属のコレージュ以外にも、他の団体による(主としてキリスト教修道会であるが) コレージュが設立されていった。このように、コレージュに関しては、ユニヴェルシテ附属、ジェズイット修道会、オラトリオ修道会などがお互いに競合関係にあり、各コレージュともいかに世間の評判を高め、生徒を集めるかをめぐって、しのぎを削っていたのである。なかでもデュルケムはジェズイットのコレージュを取り上げ、詳細に分析している。ジェズイットのコレージュは、プロテスタント教会との対立に勝利することをその究極の目標としており、そのために生徒を伝統を尊ぶ忠実なクリスチャンに育て上げるため、教育活動に関しては極めて熱心であった。当時もてはやされていたラブレーやエラスムスらの教育理論を自分たちに都合の良いように解釈し直しながら、カリキュラムに組み込んだり、社会の変動を敏感に察知しながら、教授内容や学級編成をはじめとする教育方法を、随時修正、変化させていったのである (Durkheim 1938,第2部4～7章)。

デュルケムが何度も強調しているように、ユニヴェルシテはその組織が固まり独占的な権利を有するようになると、もうそれ以上は社会環境に適応しようとはせず、変化を望まなくなる。ところがコレージュは、もともとユニヴェルシテに対峙して成立し、各団体のコレージュが競合関係にあったために、社会の変化に対応しつつ、教授方法を革新してゆかざるをえなかった。ユニヴェルシテは、ある時点でその「進化」を止めてしまったのに対し、中等教育を担うコレージュは社会環境に合わせて自らを変化させ、進化していったのである。したがって、デュルケムの講義が「フランスにおける中等教育の発達／進化 évolution[11]とその役割」と題されることになったのもうなずけよう。

結びにかえて

以上、デュルケムの記述に沿って、コレージュの内在的特性をユニヴェルシテとの比較におい

て明らかにしてきた。デュルケムは、コレージュの発達こそがフランスにおける教育制度全般の発達を促したとの認識に立ち、その理由をコレージュの有する本質に求めた。すなわち、コレージュでは、直接職業とは関係ないが、きわめて高度な内容の一般教養が教えられており、そのために生徒の思考力を養成することが可能となったこと。これが第一の理由である。そして第二に、コレージュでは寄宿学校という特性もあって学校全体としてのまとまりがあった。つまり教師と生徒とが一つの価値体系を共有する、いわば道徳共同体を形成していたという点である。第三の理由としては、コレージュは集団のまとまりと個人の自律とのバランスが良く、またコレージュ相互の間に競合関係が作用していたせいもあって、社会の変化に合わせて自らを修正・変更できたことが挙げられよう。またここで看過してはならないのが、コレージュでは、こうした三つの要因が互いに連関し合っていたという事実である。

このようにデュルケムがコレージュのもつ特性を明らかにしようとした背景には、それによって、同時代の初等教育と高等教育双方を批判できるという実践的なメリットが存在した。つまり、中等教育機関としてのコレージュ研究を通じて、初等教育から高等教育までの学校教育体系に必要な三つの要素－－－思考力の養成、学校全体としてのまとまり、社会の変化への対応－ －－が抽出できるからであった。ここにデュルケムがコレージュを研究対象とした、戦略的意図が見て取れよう。すなわち、初等教育に対しては、3R'sをやっていればいいという立場に対してアンチテーゼを示すことができ、知育の必要性を主張できる。また高等教育に関しては職業教育だけを行えばいいという考えを批判できるとともに、人々を統合する道徳教育や、社会変化への対応の必要性を論じることができるからである。

こうした立場に立てば、初等・高等教育の欠点を指摘できると同時に、中等教育機関のもつ独自性も明確となる。つまり中等教育は、「一般的な観点から、省察する能力を目覚めさせる」ことによって、初等教育とは一線を画し、さらにこうした省察力を「一般的な観点から」つまり特定の職業に制限されない形で発達させてゆく点で、高等教育とも異なるのである。このように、デュルケムのコレージュ研究を検討する作業を通して、中等教育が初等教育を高度にしたものでも、程度の劣る高等教育でもなく、独自の教育ステージを形成していることがはっきりと見て取れよう（傍点筆者）。

最後に、デュルケムがこの研究から抽き出した学校教育の三つの要素「思考力を養成」「学校としてのまとまり」「社会の変化への対応」の現代的意義を考えてみたい。中等教育は、初等教育と高等教育とは異なる独自の教育目的を有すると同時に、この両者の教育段階とも接続している。初等教育では、「思考力の養成」や「社会変化への対応」への比重は少ないが、「学校としてのまとまり」は共通のカリキュラムによって強調されている。一方デュルケムの認識では、高等教育は主として職業教育を担うため、個人の専門性を重視したり、「社会変化」への敏速な対応が強く求められるが、「学校としてのまとまり」はゆるやかになって、多様性が前面に出てくる。つまり、カリキュラムの共通性が高まれば義務教育の方向に向かい、多様性が高まれば高等教育へと通じる。初等教育から高等教育へと移行するにつれて、共通性から多様性へと両者の比重が変化してゆくのである。そして中等教育は、カリキュラムの共通性と多様性とのバランスの上に成立している。

現在の日本の高校に関していうならば、進学率の上昇や生徒の多様なニーズに応えてゆく、つ

まり「社会の変化」に対応する姿勢、多様性へと向かう流れは自然なものであって、基本的には評価できよう。ただ問題は、共通性をどのように確保してゆくかという点、言葉を換えれば、「思考力の養成」や「学校としてのまとまり」をいかに創ってゆくかという点にある。デュルケムに従えば、教育内容を多様化するだけでは、程度の低い高等教育（職業教育）と変わるところはない。中等教育機関である以上は、カリキュラムの共通性が不可欠である。そして、中等教育において共通のカリキュラムとなり得るものは「一般的な思考力」を養成するものである。デュルケムのいう「思考力」とは、何もないところに新しいものを創ってゆく創造力であり、あらかじめ解答のない問題に挑んで答えを追求してゆく力に他ならない。他方現在、高校普通科の教育では、すでに解答が準備された問題にいかに効率的に答えてゆくかという点に重点が置かれている。こうした状況の中にあってこそ、少なくともデュルケムのいう「思考力」をつけるためのカリキュラムを生み出し、高校教育の共通性を確保することが、今解決を求められている大きな課題の一つなのではないだろうか。

注

1）こうした高校進学率の上昇および生徒の多様化を反映した、現在の高等学校における教育課程の特徴は次の三つに要約されよう。つまり多様化、個別化、柔軟化である。この三つの特徴に関して、それぞれ代表となる事例を簡単に見てみよう。

まず多様化に関しては、これまで普通科と専門学科に二分されていた学校制度の中に、新たに総合学科が加わったことが注目される。そればかりでなく、普通科、専門学科、総合学科それぞれの学科の内部でさらに教育課程が多様なもとのなっている。例えば、普通科も進学コース、非進学コースをはじめとする多様なコースが置かれているし、専門学科については、農業、工業、水産、看護、家庭、外国語、理数、体育、音楽、美術、英語などその他多くの学科に分かれている。総合学科もまた、進学や職業に関する進路適性を自ら発見し、主体的学習が可能なように多様な選択科目群が置かれている。

個別化の代表的な事例としては、単位制高校があげられよう。ここでは、学年段階による進学の原則が廃止され、卒業要件となる一定の単位さえ履修すれば、卒業が認められる。学習は基本的には生徒個人単位で行われ、学級や学年といった教育集団の枠組みは、廃止されるかまたは、著しく弱められている。

最後の柔軟化は、進学者の選抜方法の大幅な緩和の中に認められる。「ボランティア体験」が選抜の資料として用いられたりといったような、選抜基準の多様化や、進学者の学力範囲（レンジ）の拡大があげられる。

2）Durkheim（1938）.なお、『フランスにおける教育の発達』からの翻訳は既訳を参考にしつつ、筆者自身が行った。

3）デュルケムは前年度1902～03年に「道徳教育論」(L'éducation moral)という題目の講義も開講しているが、講義「道徳教育論」は前任校であるボルドー大学で1897～1902年にかけても行われていた（麻生誠1981、p.296.）。デュルケムの死後、弟子たちの手によってこれらの講義の草稿が編纂され、『道徳教育論』(L'éducation morale)および『フランスにおける教育の発達』(L'évolution pédagogique en France)と題して刊行されたのである。

4）フランスで今日のように学校教育体系が初等・中等・高等教育という三つの段階に分化しはじめるのは、公立小学校が創設された革命期以降であり、デュルケムの活躍した第三共和政下では、初等・中等・高等の各教育段階の整備および接続のあり方が大いに議論されていた。

5）そのため本論文では、Universitéを近代の高等教育機関としての「大学」と混同することを避けるため、「ユニヴェルシテ」と記述し、Collègeは「中学校」ではなく「コレージュ」と記述している。

6）この種の寮は、13世紀初頭には既に存在していたが、普通は病院や宗教施設に付属していた(Durkheim 1938, pp.127－128 .／ 邦訳、1981、226－227頁）。

7）〈collège〉という言葉は、もともと神聖な職務に携わる人々の集団、教会の信者の集団を意味していたが、1549年、教育機関コレージュという意味で用いられるようになった。1848年に中等教育機関の名称として用いられるようになり、現在に至っている。(Paul Robert, *Dictionnaire alphabétique et analogue de la langue française*, 9vol., Paris, Le Robert, 1985.)

8）教師が学校を創設する際には、ノートル・ダムの大法官から「教授免許状」をもらうことが不可欠であり、しかも大法官は自らの裁量でこの免許状を授与できたばかりでなく、一度与えた免許を取り上げる権限さえ有していたからである。そのため教師は常にカトリック教会の顔色をうかがい、いつ職を奪われるかとびくびくしていなければならなかった。(Durkheim 1938,1ère Partie Chap.8)

9）1904～05年にかけてまさしく「小学校における知的教育論」と題する講義を行っている。が、残念なことにその講義の草稿は、散逸してしまい、現在参照することができない（アルパート　1977　邦訳、48頁）。

10）その最たる例として、デュルケムは16世紀に誕生し、18世紀までに多くの発展を遂げた自然科学が、この自然科学がユニヴェルシテで教授されるようになるには、19世紀を待たねばならなかったことを挙げている(Durkheim 1938, p.191：邦訳、331－332頁）。

11）デュルケムは、あたかもひとつの生物が進化していくかのように、教育制度の発生と進化とを把握しようとした。このような生体論的解釈は、現在からしてみると、多少理解しがたい側面もあるが、19世紀フランスの思想界の底流をなしていたのが、ダーウィンの進化論であったことを考えれば、納得できよう。事実、フランス語<évolution>がもつ「進化・発展」という意味は、ダーウィンの用いた英語<evolution>の訳語として、1870年頃入ってきた。その後、ダーウィニズムの流行とともに、しばしば用いられることとなる。(Paul Robert, *Dictionnaire alphabétique et analogique de la langue française*, 9vol., Paris, Le Robert, 1985.参照)

参考文献

H. アルパート著花田綾・仲康・由木義文訳『デュルケームと社会学』、慶応通信、1977。

麻生誠　1981、「E. デュルケム－教育社会学の創始者－」松島鈞編『現代に生きる教育思想　第三巻フランス』、ぎょうせい。

Durkheim, Emile 1938(1990), *L'évolution pédagogique en France*, Paris, ≪Quadrige≫, P.U.F.. ／ 小関藤一郎訳『フランス教育思想史』行路社　1981。

———, 1925(1974), *L'éducation morale*, nouvelle édition, Paris, ≪Quadrige≫, P.U.F.. ／ 麻生誠、山村健訳『道徳教育論（1・2）』明治図書　1964。

井上俊、大村英昭編　1993、『改訂版 社会学入門』、放送大学教育振興会。

門脇厚司、陣内靖彦編 1992、『高等教育の社会学～教育を蝕む<見えざるメカニズム>の解明』、東信堂。

Leon, Antoine 1967, *Histoire de l'enseignement en France*, Paris, P.U.F.. ／ 池端次郎訳『フランス教育史』白水社、1969。

新堀通也　1966、『デュルケーム研究－その社会学と教育学－』、文化評論出版。

白鳥義彦　1995、「デュルケームの大学論」『社会学評論』Vol.46,No.1、46－61頁。

Importance of "collège" in Durkheim's educational theory:
In Search of A Perspective to Examine Secondary Education in Japan

Naoko KITO

This article, focuses on Durkheim's analysis of historical and social development of secondary education in France(L'evolution pedagogique en France :1938), and examines his theoretical analysis of secondary education, in order to search a new perspective toward the solution of various problems in current secondary education in Japan .
Therefore, the purpose of this paper is to look for an answer to the following questions by applying Durkheim's analysis. "Does education in a senior high school have unique characteristics which are different from elementary education or higher education? "" What does originarlty mean in high school education ? "
In his study, Durkheim focuses on three points concerning the characteristics of secondary education: trainig the faculty of thinking, totality of a school, and adaptation to social changes." And these factors are linked closely each other.
According to Durkheim, the main purpose of secondary education is to train the faculty of thinking, unlike in elementary education, and from a general perspective, not from a limited point of view like in higher education. This perspective will give us an important insight into high school education in Japan, which is faced with many problems as the result of recent educational reforms.